

イスラーム思想における神の概念
—— 創世神話との比較考察
God in Islamic Theology :
A Comparative Study to Creation of the Universe

座喜 純

前書き

人類の歴史の始まりから今日に至るまで、そして恐らく世界の終末が訪れる時が来ても、尽きることのない様々な議論を呼び起こすような、いくつかの主題が存在する。そのような主題のうちで核となる一つのテーマは、万物の創造とその創造主の謎である。これまであるゆる分野の学者たちが、各人の専門分野のアプローチで追究しようと試みてきたが、各々の論点は異なり、万人の理解を得る結論が出ていない。本論では、創世神話との比較の観点から、イスラーム思想に基づき、この主題の解明をはかりたい。

本論では、イスラームにおける唯一かつ絶対の存在「アッラー」に関する思想とその概念、ギリシア神話や『古事記』における神々の本質と概念を、森羅万象がどのような意義と過程のもとで創造されたかという創世の描写を通じて考察し、比較論的な観点からイスラームにおける創世論の解明に光を与えたい。

更に、イスラーム思想の拠り所として、コーラン、ハディース（預言者ムハンマドの言動）および主要イスラーム史書を取り上げ、古代ギリシアの叙事詩『神統記』と日本最古の史書『古事記』を対照文献とし、比較考察の対象として取り扱う。

人類が永遠の主題として探求してきた真理の解明は、次世代への大きな恵みとなろう。

第一章 イスラーム思想における神の概念

イスラームにおいては、神の概念とその属性は非常に明確で、人びとが理解し易いように平易な表現で示されている。

とりわけコーランの純正（アル・イフラス）の章（112 章）には、唯一の神アッラーの属性が簡明な数語で集約されており、神は、我々の一般概念を超越した存在であることが明確に示されている。

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。 言え、「かれはアッラー、唯一なる御方であられる。アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない、かれに比べ得る、何ものもない。」（コーラン 112 章）¹

このように純正の章では、森羅万象はアッラーの被造物に過ぎず、いかなる被造物もかれとは対比できないこと、アッラーは唯一の神であり、かれの存在は永遠であり、始めも終わりもない絶対の存在であることが示されている。さらにアッラーの属性には動物的資質はなく、子を持ったり、父になったりすることを考えては

¹ 宗教法人日本ムスリム協会、『日垂対訳・注解 聖クルアーン』第7刷、2002年、p.806、以降コーランからの引用は全て同書に拠る。

ならないことが記されており、かれの属性と威力に並び得るものは何ものもないと明言されている。ここでいう「自存(サマド)」とは、永世の絶対的存在を指し、他のすべてのものは束の間の存在であること、またアッラーは何も欠けておらず、人や物などの森羅万象はかれによって存在することを意味している。

イスラームにおける崇拜の対象たるべき神の主な特質は、以下の通りである。²

1. 唯一性：神性または支配を分かち如何なる存在をも持たない、唯一、真の神である。
2. 自立性：自存し、如何なるものの助けも必要としない。妻子も存在しない。
3. 全能性：神の能力を脅かすものはこの世界のどこにも存在しない。神に限界はなく、助力も必要とせず、何事も望みのままである。ただ「在れ」と言いさえすれば、それは在る。
4. 永遠性：不死であり、永遠である。
5. 不眠性：眠りに落ちることはなく、それによって意識を失うこともない。まどろみに襲われることもない。
6. 包括的所有性：存在するものすべては唯一神アッラーに帰す。
7. 全知：神の知性は全宇宙を取り巻くものであり、蟻のようなほんの小さな存在でさえ、そこからこぼれることはない。見えるもの見えないもの、そして過去現在未来、人間の心の中までも、アッラーはすべてご存知である。
8. 至高性：神の本質、雄大さ、優越を超えるものはこの世界に存在しない。
9. 寛大なる慈悲：何事をも見誤ることはなく、不正に罰することもない。むしろアッラーは、アッラーに従う者を愛し、また彼らの罪を赦される。

上記のような神性を有する唯一の存在がアッラーであり、かれが創造した全ての被造物は、創造主に帰依して崇拜を捧げるべきであるとされている。

アッバース朝時代のバグダッドで活躍した歴史学者であり神学者のアブー・ジャアファル・ムハンマド・イブン・ジャリール・タバリー³は、コーランの引用を交えて神の属性について次のように述べている。⁴

アッラーに称賛あれ、森羅万象の始まりの前の始まり、あらゆる終わりの後の終わり、尽きることなく存在し、すべてを遍く掌握され、起源も何の範もなく、万物を創造される創造主。唯一無二の御方。なにものよりも後まで、無限に永遠に存在される御方。莊嚴にして偉大、華麗にして力強く、権威と権力を有される御方。

その威力において並びたつ事象なく、その無類さにおいて対等の存在なく、何の助けも支援者も要せず、子もなく、配偶者もなく、「かれに比べ得る、何ものもない」（コーラン 112 章 4 節）。⁵

主は、人間の想像を超絶し、天によっても地によっても包含できず、「視覚ではかれを捉えることはできない。だがかれはすべての視覚さえ捉えられる。またかれはすべてのことを熟知され、配慮されておられる」（コーラン 6 章 103 節）。⁶

このようにイスラーム世界では、森羅万象の創造は、唯一の神、アッラーによるものとされているが、ここで先ず、アッラーによる創世の過程を確認し、イスラームにおける神の概念の本質についてさらに追求したい。

² 座喜純『常態のイスラーム—いまだ照らされていない世界—』徳高書店、2003 年、pp. 26-27。

³ 生年 838 年 - 923 年。カスピ海南岸のタバリスターン地方（現在のマーズンダラーン州）の州都アーモルの出身。ハディース学とクルアーン解釈学（タフスィール学）で優れた業績を修めた権威。著書『History of the Prophets and Kings』は、後世の歴史学とタフスィール学の基礎として現在でも最重要文献の一つとされている。

⁴ محمد بن جرير طبري،『تاريخ الزسل والملوك』، دار المعارف، p.3.

⁵ 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』p.806。

⁶ 同上 p.165。

神の啓典「コーラン」と共に、神の使徒であり最後の預言者であるムハンマドの言行録であるハディースは、イスラーム教徒にとって遵守すべき規範であるが、ムハンマドを典拠とする以下のハディースにおいて、神による最初の創造物はペンであるとされている。

アルワリード・イブン・ウバーダ・イブヌッ・サーミトの父ウバーダ・イブヌッ・サーミトは、「我が息子よ、私は神の使徒が、『神によって最初に創造されたのはペンである。神はペンに『書け』』と言われた。するとそれは進み出て、その時から起きる出来事を書き始めた』、と語られるのを聞いた」、と語った。⁷

伝承経路が明確で信頼性の高いハディースにおいて、神の使徒が、「神によって最初に創造されたのはペンである」、と語ったということは、イスラーム世界では、ペンより先に創造された、如何なる例外も存在しないことを示す。つまり、神の使徒の、「神によって最初に創造されたのはペンである」という伝承は、ペンが万物の前に創造され、玉座や玉座の下の水もそれ以外のあらゆるものも含め、一切の例外が無いことを意味する。

次に、ペンの次に創造されたのは何かという主題に関して、コーランの中で次のように言及されている。

諸天と大地、その中にあるものを六日の間に創造されたのは神である。そして主は玉座に真っ直ぐに座られた。汝らには主のほかには友も調停者も無い。それが分からないのか。(コーラン 32 章 4 節)⁸

言ってやるがいい。「あなた方は、二日間で大地を創られたかれを、どうして信じないのか。しかもかれに同位者を立てるのか。かれこそは、万有の主であられる。かれは、そこに山々をどっしりと置いて大地を祝福なされ、更に四日間で、その中のすべての御恵みを求めるものの必要に応じて規定なされた。それからまだ煙のようであった天に転じられた。そして天と地に向かって、「両者は、好むと好まざるとに関わらず、われに來たれ。」と仰せられた。天地は答えて、「私たちは喜んで参上します。」と申し上げた。そこでかれは、二日の間に七層の天を完成なされた。そしてそれぞれの天に命令を下し、大地に近い天を、われは照明で飾り、守護した。これは、偉力ならびなく全知なる御方の摂理である」。(コーラン 41 章 9-12 節)⁹

上記のコーランや、イブン・アッパースが神の使徒ムハンマドを典拠として伝えている、最も信頼できるハディースを論拠とすると、神は日曜日に大地を、木曜日に天を、そして金曜日に日月星辰を創造したとされている。¹⁰日曜日から金曜日までの六日間の間に森羅万象の創造がなされたということである。

さらに金曜日に神が行った創造の詳細に関しては、以下のような神の使徒ムハンマドを典拠とする信頼性の高いハディースが伝わっている。

金曜日の残り三時間までに主は、日月星辰と諸天使を創造された。残り三時間の最初の時間に主は、生きる者と死ぬ者の寿命を創造された。第二の時間に主は、人間にとって有益なものすべてに害悪を投げ込まれた。そして第三の時間に主は、アードムを創造されて、彼を樂園に住まわせられた。主はイブリース（悪魔）に跪拝するように命じられ、そして主はその最後の瞬間にアードムを樂園から追放された。¹¹

最初の創造物であるペンの誕生から、人類の祖アードムの誕生と樂園の追放まで、イスラームにおける、アッラーによる森羅万象の創造の過程に関しては、前述のように確認できたが、ここで、アッラーによる万物の創造以前に、何かが存在したのかという疑問が生ずるのは自明の理であろう。

この点に関して、以下のコーランの章節が明確な回答である。

⁷ 『تاريخ الرسل والملوك』 p.32。

⁸ 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』 p.505。

⁹ 同上 p.590。

¹⁰ 『تاريخ الرسل والملوك』 p.48。

¹¹ 同上 p.55。

かれは最初の方で、また最後の方で、外に現われる方でありまた内在なされる方である。かれは凡ての事物を熟知なされる。(コーラン 57 章 3 節)¹²

また、以下のような神の使徒ムハンマドを典拠とするハディースも伝えられている。

アブー・ホライラからヤズィード・イブヌル・アサンムに、ヤズィードからジャアファルに、ジャアファルからザイド・イブン・アブッ・ザルカーアに、ザイドからアリー・イブン・サフルッ・ラムリに伝えられたところによると、神の使徒は次のように語った。「私の死後、そなた達は、尋ね続けるだろう。誰かが『すべてを創造されたのはアッラーである』と言い、また誰かが『しかし誰がアッラーを創造されたのか』、と尋ねるまで」。¹³

前述の神学者タバリーもこの件に関連して次のように見解を述べている。

「もし人びとがあなたに尋ねるならば、神はあらゆるものの創造主でいらっしやり、あらゆるものの前に存在され、あらゆるものの消滅後まで存在される御方である、と答えなさい」、とアブー・ホライラが語るのを聞いた。ゆえに結論は、あらゆるものの創造主は、何もかも存在しないとき既に存在された、ということである。主はすべてを創造され、そしてそれらを統治された。それから主は、時代と時間の創造の前に、太陽と月を創造される前に、そして太陽と月の運行を創始される前に、創造されたすべてのものについてさらに諸々のものを創造された。日付と時間と時代が確立され、夜と昼が区分されるようになったのは、太陽と月の運行に拠る。¹⁴

主は、時間も時代も無く、夜も昼も無く、主の至高の御顔の光を除いて暗闇も光もなく、天も地もなく、太陽も月も星辰も無い状態の中に存在された。主以外の万物は創造され、統治された。主は、御独りで、仲間もなく、支援者もなく、助手もなく、すべてを創造された。¹⁵

上記のようにイスラームでは、唯一の神アッラーが全ての存在の前に存在し、万物の創造もすべてアッラーの意志と力のみでなされ、その創造の過程もコーランや神の使徒ムハンマドの伝承によって極めて明瞭に説明されている。

この世には、独立型の物体と依存型の物体以外、目に見えるものは存在しない。物体には、個々の構成要素から成り立つ集合体と組成された個体が存在する。集合体の各要素間は連立しているが、組成された個体は分離されると存在意義を喪失し、何かの作用を受けない限り、分離したものは再結合できない。また何かの作用を受けない限り、組成された個体は分離しない。この世のあらゆるものが、かくの如く存在しているのであれば、可視の存在だけでなく、不可視の存在にも、独立型の物体と依存型の物体の存在に関する理論が通用することになる。

もう一つ注視すべき事項は、自ら創造できないものは、疑いなく創造されたものであるという点である。組成された個体が分離される場合、その個体よりもはるかに優れた偉大な力と存在によって分離される。逆に個々の構成要素から成り立つ集合体が結合する場合も、その集合体よりもはるかに優れた偉大な力と存在によって、集合体は結合する。

イスラーム思想上でこの理論を展開するならば、前段落で述べた、はるかに優れた偉大な力と存在こそ、比類なき全能の存在、異なるものを束ねる存在、並ぶべきものの無い存在たるべき、唯一神アッラーの本質を示

¹² 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』 p.676。

¹³ 『تاريخ الرسل والملوك』 p. 31。

¹⁴ 同上 p.31。

¹⁵ 同上 p.30。

すものとなる。

つまり前述の主題に立ち戻ることになるが、上記理論の結論からも、万物の創造主たる神は、その万物の創造以前から存在し、その後、夜と昼、時と時間は創造されたということが示唆される。なぜならば、万物を統治し、管理する創造主がすべてのものの前に存在されない限り、あるものがあるものを創造することは不可能だからである。

イスラームにおける神の属性については、本章の冒頭ですでに明らかにしているが、神の本質の中でもっとも重要な、神の唯一性に関して、もう一度ここで熟考したい。

なぜイスラームでは、永遠の存在である創造主つまり神が、複数存在することが認められないのか、という主題は、ノンムスリムにとって自然な疑問であり、イスラームへのアンチテーゼとして存在しよう。

ダマスカス出身の神学者イブヌル・カイイム¹⁶は、唯一神アッラーの神性を証明する信仰告白「崇拜されるべきは、唯一神アッラーをにおいて他にはいない」を証言することは、アッラーは神である、と言うことよりも重要であると主張している。¹⁷なぜならば、後者は崇拜の対象となりうる、他の存在への神性を否定していないが、前者は必然的にアッラーのみに神性を限定し、他のいかなる存在にも神性を肯定することを否定するからである。

もし、その天地の間にアッラー以外の神々があつたならば、天地はきつと崩壊したであろう。それゆえ玉座の主、彼らが唱えるものの上に高くあられるアッラーを讃えなさい。(コーラン 21 章 22 節)¹⁸

アッラーは子をもうけられない。またかれと並び立つほかの神も存在しない。そうであれば、それぞれの神は自分の創ったもので分裂しお互いに抜き出ようとして競い合う。アッラーに讃えあれ。かれは彼らの配するものを超越され、幽玄界と現象界を知っておられ、彼らの配するものの上にあられる至高の存在である。(コーラン 23 章 91-92 節)¹⁹

イスラームでは、上記のコーランの章節が最も雄弁な証拠かつ最も明瞭な回答であるばかりでなく、他の神々を唯一神アッラーと並び立たせることが誤りであることを示す、最も明白な証明となされている。

イスラーム思想上、異なる意志を持つ二つの存在に神性として認めることは、前述の神の啓示「もし、その天地の間にアッラー以外の神々があつたならば、天地はきつと崩壊したであろう。」の如く、天と地の崩壊を意味しよう。一方が何かを創始し創造するならば、それを消滅させ無効とすることが、もう一方の作用だからである。火はものを温め、雪は火が温めたものを冷やすように、二つの存在は反作用する。

またもう一つの議論、もしアッラーに並び立てて他の神々の存在を主張することが正論であるならば、永遠と考える二つの神性を具有する存在は、必然的に強力か無力かのいずれかとあろう。もし両方が無力であれば、それらは打ち負かされる存在となり、到底、神とはなり得ない。

もし両方が共に強力な存在であれば、各々が強力な他方を打ち負かすことは不可能であることから、その力は無効となり、そのような無効な存在は神ではない。また両方が強力で力量が相殺されるならば、やはりその力は無効となろう。

それゆえイスラームでは、アッラーに並び立つ存在はなく、永遠の存在である万物の創造主は、あらゆるも

¹⁶ 生年 1292 年-1349 年、イブヌル・カイイムは俗称で、本名はムハンマド・イブン・アブー・バクル・イブン・アイユーブ・イブン・サアド・イブン・ハリズ・イブン・マッキ・ザイドッ・ディーンッ・ザルイッ・ディマシュキユル・ハンバリ。

¹⁷ 『常態のイスラーム—いまだ照らされていない世界—』 p.25。

¹⁸ 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』 p.395。

¹⁹ 同上 p.423。

のの前に存在し、あらゆるものの後まで存在するという解に導かれることになる。

第三章 ギリシア神話における神の概念

本章では、ギリシア神話における宇宙の始源と太古の神々の生誕を詠った、ギリシア最古の叙事詩人ヘシオドスの『神統記』を通じて、ギリシア諸神の系譜における神の概念や属性に関して、考察する。

『神統記』におけるヘシオドスの主題は、コスモス(宇宙世界)の生成・確立と、その統治者となるゼウスへの賛美と彼を主神とする宇宙秩序の観念の成立である。下記は、この叙事詩の序詞の終末部であるが、ヘシオドスの意図が、集約されて描写されている。

語りたまえ はじめに 神々と大地が また諸河と大浪荒れる涯しない海が また輝きわたる星辰 高く広がる天空が(この両柱から生まれた善きものの贈り手なる神々が) いかにして生まれたもうたかを。

また神々がどのように富を配り いかに特権を分かちあい さらにまた どのようにして はじめに山巒たたなずくオリュンポスの高嶺を手中に納めたもうたかを。²⁰

森羅万象の創造のはじまりに関して、『神統記』は「原初の生成」という見出しと共に、次のように描写している。

まず原初にカオスが生じた さてつぎに胸幅広い大地 雪を戴くオリュンポスの頂きに 宮居する八百万の神々の常久に揺るぎない御座なる大地 と 路広の大地の奥底にある暖々たるタルタロス 更に不死の神々のうちでも並びなく美しいエロスが生じたもうた。

この神は四肢の力を萎えさせ、神々と人間ども よろずの者の胸うちの思慮と考え深い心をうち拉ぐ。²¹

このように現宇宙の生成は、先ずカオス(空隙)が生ずるところから始まり、次にカオスの中に、ガイア(大地)、そしてタルタロス(冥界)と エロス(愛)が誕生する。このカオス・ガイア・タルタロス・エロスは、「原初の生成」というタイトルから、ギリシア神話において原初神と呼ばれるが、これは創世以前からカオスが存在したということを意味するものではなく、創世において、何もない「場」すなわち空隙として最初にカオスが存在し、その中に残りの原初の神々が存在を現したということであろう。またカオス以外の原初の3神は、カオスの中に誕生しているが、いずれの神も誕生の時点では人格的な特徴は具有しておらず、カオスが生んだ子とはされていない。森羅万象の始原として生成されたカオスは、他の神々と交わることはなく、意志や人格を具備した描写もないことから、極めて象徴的かつ非人格的な存在と言えよう。このようにギリシアの天地生成はあくまで自然発生的に起こったものであることが考察できる。

その後、カオスの子としてエレボス(幽冥)と ニュクス(夜)の2神が生まれ、ニュクスはエレボスとの情愛の契りにより、アイテル(澄明)とヘメレ(昼日)を生む。そして天をも内包した世界そのものであり、地母神たる本質を備えたガイアは、他の神と交わることなく、ウラノス(天)、山々、ポントス(海)を生み、ウラノスと親子婚した後、彼との間に更に神々を生んだ。結果として、その後に誕生する多くのギリシア神たちの筋筋はガイアに遡る。こうしてガイアをはじめとする神々は婚姻関係を持ち、彼らに意志と感情を表す人格的な属性が現れる。

一方、カオスの娘である女神ニュクスは、他神と交わることなく更に単独で多数の神々を生んだとされる。

²⁰ 廣川洋一訳『神統記』岩波文庫、1984年、pp.20-21。

²¹ 同上 pp.21-22。

この神々は、人間の存在の在り様に関する概念の神格化が多く、モロス（死の定業）、ケール（死の命運）、ナトス（死）、ヒュプノス（眠り）、オネイロス（夢）、モーモス（非難）オイジュス（苦悩）、ネメシス（憤り）、アパテ（欺瞞）、ピロテス（愛欲）、ゲラス（老齢）等である。さらに人間の苦しみの大きな原因とも言える「争い」の女神エリスも彼女の子である。そのエリスもまた単独で神々を生み、彼女からは労苦、飢餓、悲嘆、戦争、殺害、紛争、虚言、破壊等、人生における災いや人間の為す悪しき事象の擬人化・神格化と言える神々が生まれている。このような人間の属性ともいうべき、概念や本質の擬人化・神格化は、多くのギリシア神の特徴の一つである。それゆえ彼らは擬人神であると共に、その神名は一般概念の普通名詞として、現代に至るまで広く知られ、使用されている。

ここまで『神統記』の二大主題の一つである、宇宙世界すなわち原初の生成とギリシアの神々の誕生の流れを確認したが、もう一つの主題である主神ゼウスによる宇宙世界の統治を通じて、ギリシア神の本質に関して考究したい。

原初の生成と神々の誕生の後、『神統記』では、ウラノス - ウラノスの息子クロノス - クロノスの息子ゼウスの三代にわたる政権交代劇が説かれている。

さて大地（ガイア）は はじめに彼女自身と同じ大きさの 星散乱える天（ウラノス）を生んだ 幸う神々の 常久に揺るぎない御座となるようにと。²²

『神統記』の中で、上記のようにウラノスは誕生した。彼はガイアの息子であると同時に彼女と親子婚して夫となり、彼女との間にティタン族12神をもうけ、ギリシア神の中で最初に全宇宙を統治する神となった。ウラノスは天空神とされているが、ギリシアでは、天は元来暗いものと考えられていた。彼は、「星散乱える」という称号から、全身に銀河を散りばめた宇宙の神と考えられていた。『神統記』では、夜の間暗くなるという事象に関して、ウラノスがガイアと交わる為にニュクス（夜）を伴って彼女に近づくためと描写されている。

やがてウラノスはガイアとの間にもうけた神々を恐れ、彼女の胎内に押し込めたため、彼女はそれを怨み、末子の農耕神クロノスに彼を去勢させ、クロノスは父ウラノスから全宇宙を統治する王権を奪取するが、自らの両親であるウラノスとガイアから、彼もまた自分の子に王権を奪われる運命にあることを予言される。この予言による猜疑心から、クロノスは子の神々を自ら呑み込んでいたが、密かにクレタの大地で育てられた末子ゼウスによって、全宇宙の統治権を巡るティタノマキアの戦いを経て、予言通り彼は打倒される。

最終的にゼウスは全宇宙の統治者となり、社会的秩序を司る全知全能神として、オリュンポスの神々の王、そしてギリシア神話の主神となる。

だが不滅の智弁えるゼウスは 事の次第を察知し たくらみに気づきそこなうことはなかったのだ。

上記のように『神統記』では、ゼウスの属性として、単に威力および腕力において全能であるだけでなく、知的かつ倫理的な点においても全能であることが明示されており、主神たる彼の王権統治により、初めて宇宙世界に秩序と平和が形成・確立され、整序者、正義の具現者としてのゼウスの特質が褒め称えられている。ゼウスの存在と彼の覇権・統治そのものが、創世期が終わりを告げ、生成された森羅万象に正しい秩序が生まれ、それが確立されたことの象徴とも解釈することができよう。

『神統記』全編を通じて、ヘシオドスが詠う創世と諸々の神の誕生は、自然現象や森羅万象の秩序形成、人間における定めや矛盾・困難を擬人的に表現しているよう。

²² 『神統記』 p.23.

始原のカオスが現れて以来、ギリシアの神々は多数誕生し、その存在は並び立ち、各々の神の特性はその神が司るものを象徴する。また彼らは意志や感情と人格を備え、単独神から生まれる神々がいる一方で、人間のように神と神の交わりと婚姻により生まれた神々も存在する。また自然の属性や本質の象徴たるべき神もいれば、ニュクスやエリスが生んだ神々のように、人間の在り様の概念を擬人化・神格化した神々も存在する。

ギリシア神話において、始原の四神を除き、総じて神々は、他の神から生まれている。始原の四神に関しては、カオスを初めとして順に、その存在は他の神から生まれることなく出現する。神々には人間のような人格と意志が具有されるが、神が被造物を創造するという話の展開は、『神統記』の中で見あたらない。これはギリシア神話の一つの特徴であろう。また神々の出現の過程において、ゼウスをはじめとする神々は、各々、属性と本質を備えており、万物の創造は正しい秩序のもとに淘汰されるものの、神とそれ以外の存在を区分するような神の本質や概念については語られていないこともギリシア神話の特性と呼べよう。

第四章 日本神話における神の概念

前章では、ヘシオドスの『神統記』を通じてギリシア諸神の系譜における神の概念や属性に関して考察したが、本章では『古事記』の特に天地開闢に関わる内容を通じて、古代の日本神話における神の概念を確認すると共に、その特質について考究していく。

古代の日本神話に登場する神々は、天津神（あまつかみ）と国津神（くにつかみ）に大きく二分類される。『古事記』で言及されている、創世、天地開闢に関わる天津神は高天原に在る、または高天原から天降った神の総称とされており、それに対して国津神は地上世界に根拠を持つ神々の総称とされ²³、日本神話における天地開闢、つまり森羅万象の創造・創始の際に出現したのは天津神であった。

古事記の始まりである「天地初発」、つまり森羅万象の始まり、創世にあたる描写は以下の通りである。

天地初めて發れし〔之〕時に、〔於〕高天の原に成れる神の名は、天の〔之〕御中主（アメノミナカヌシ）の神。〈高の下のを天を訓みて阿麻と云ふ。下は此れに效ふ。〉次に高御産巢日（タカミムスヒ）の神。次に神御産巢日（カムムスヒ）の神。此の三柱の神は〔者〕、並に獨神と成り坐して〔而〕、身を隠しき〔也〕。

次に國稚く浮ける脂の如くして〔而〕、久羅下那州多陁用弊流〔之〕時に、〈流の字より〔以〕上の十字は音を以ゐる。〉葦牙の如く萌え騰がれる〔之〕物に因りて〔而〕成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲（ウマシアシカビヒコヂ）の神。〈此の神の名は音を以ゐる。〉次に天の〔之〕常立（アメノトコタチ）の神。〈常を訓みて登許と云ふ。立を訓みて多知と云ふ。〉此の二柱の神も亦並に獨神と成り坐して、身を隠しき〔也〕。

上の件の五柱の神は〔者〕、別天つ神ぞ。（1 天地初発 43—47）²⁴

天地開闢、つまり天と地が初めてその姿を現した時、高天の原には、アメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カムムスヒという三柱の神（造化の三神）が、いずれも男女の性別の無い「独神（ひとりかみ）」として順次成り立ち、そのまま身を隠したとされている。また三柱のうちの二柱の神の名につけられている、産巢日（ムスヒ）は借字で、本来は「産霊」であり、万物を生成する力を意味するとされている。²⁵この頃、現れた大地は水に浮いた脂のような、漂うクラゲのような混沌たる姿であったが、三柱の神々の次に出現したのはウマシアシカ

²³ 三浦祐之訳・注釈『口語訳古事記[神代編]』文春文庫、2006年、p.39。

²⁴ 神野志隆光・山口佳紀『古事記注解 2』笠間書院、1993年。

²⁵ 千田稔『古事記の宇宙』中公新書、2013年、p.48。

ビヒコヂで、泥の中から萌え出た葦の芽に例えられるように、生命力の象徴として描写されている。このウマシアシカビヒコヂと次に現れたアメノトコタチもまた独神として身を隠した。天地開闢の際に現れたこれら五柱の神々は、天津神の中でも特別な存在として、『古事記』において別天津神(ことあまつかみ)と記されている。このように別天津神は、全て「独神で身を隠した」とされ、存在自体も非常に観念的であるため、神々の名前すらも万物生成の展開や生命力を示す、一種の象徴的な存在と捉えることができよう。このような特性は、意志や人格を具備していないギリシア神話の原初神に通じるものである。

次に『古事記』では、別天津神の次に出現した十二柱七代の神々を称して神世七代と記されている。

神世七代の最後に現れたイザナギとイザナミの二柱の兄妹神は、先代の別天津神らに、未だ混沌として漂っていた大地を完成させるよう命じられる。二神は、天空に浮かぶ天の浮橋に立ち、ドロドロと漂う地表をかき回してオノゴロ島を創り、その島に降り立って兄妹婚し、先ず豊かな島や大地を生み(国生み)、次に風や山や水、霧や火などのあらゆる自然を神として生み成していく(神生み)。

極めて抽象的だった先代の別天津神とは異なり、神世七代では次第に神々が男女の性別に別れ、最終的には夫婦となり子を成す過程をもって、男女の身体的・性質的な性別が整っていく様相と、確固たる天地や島々の形成と自然の本質そのものを具有する神々の誕生が描かれており、自然発生的に成り立って出現する神々から、神から生まれる神々へと、神の特性にも変化が生ずる。日本の神々にはギリシア神のように人間の在り様の概念を擬人化・神格化する特性は見当たらない反面、「国生み」という、神が生んで被造物が誕生するという点は、ギリシア神話には見られない日本の神話の特性であろう。

このような神々の特性に関して、本居宣長は、「古事記伝」の中で、神の意義として次のように述べている。

迦微と申す名ノ義(こころ)は未ダ思ヒ得ず。さて凡そ迦微とは、古御典等(みふみども)に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其(ほか)何にまれ、尋常(よのつね)ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。²⁶ (迦微(カミ)という意味は、まだ思いつかない。すべてカミというのは、古典などにみえる天地の諸々の神をはじめ、それらをまつる神社に坐す御霊をも指し、また人は言うまでもなく、鳥・獸・木草の類、海・山などその他なんであろうとも、尋常でないほどすぐれたところがあって、かしこきものをカミと言う。)

ここで述べられている「すぐれたる」とは、尊きこと、善いこと、功しいこと、優れていることのみを示すのではなく、恐れを抱かせるもの、奇妙なもの、世の中で目立つものすべてを示しており、それらはすべて神と呼ばれることになる。また海や山などを神聖視するのは、その場所に宿る御霊のみを対象としている訳ではなく、海や山という存在自身に非常に畏敬の念をもつためであり、海や山そのものを指して神と言うのである。前述の通り、本居宣長は、神というべきものを列挙したが、それは「かしこきもの」、つまり畏怖の念の対象を神とみただけで、「カミ」の意味はまだ思い付かないと冒頭で告白しており、「神とは何か」と問われても的確に定義づけられない状況を如実に表現している。ギリシア神話同様、『古事記』においても、神とそれ以外の存在を明確に区分するような神の本質や概念については言及されておらず、このような本居宣長の記述こそが、日本の神の本質をいい当てたものはないのではないかと考えられる。古来、日本人は、風も樹も山もすべて「かしこきもの」、つまりカミと考えた。すなわち収穫や大漁といった幸いと恵みをもたらすもの、災いをもたらすもの、意志もなく人格もなく空中を浮遊しているような目に見えないものに至るまで、およ

²⁶ 子安宣邦『平田篤胤の世界』ペリカン社、2001年、p.89。

その力の及ぶべくもない、すべての自然が畏敬の対象であったからであろう。

大地や水などの自然の本質と生成力に人格や意志の要素は無い。そこに存在するのは大いなる生成力と旺盛な生命力のみである。この目に見えない逞しい力こそが、神々の存在の源とも考えられよう。このような生命力に対して、古代日本人は敬意と畏怖を持って、「神」と呼んだのではなかろうか。

このように古代日本の神話の源流をたどると、論拠を求めるよりも、目に見えないものを目に見えないままて受容し、その存在と力に畏敬の念を抱く、日本人の心意構造の特性をも垣間見ることができる。

総括

多くの場合、神話はかつて生きていた宗教や信仰の内実、すなわち世界の「真実」を神聖な物語または象徴の形で記録したものと言えよう。

ギリシア神話における神々の概念については前述した通りであるが、古代ギリシア人は、人間と非常に似た属性を具有する神々を宗教的信仰・崇拝の対象として考えていたのか、という主題に関しては諸説ある。

ソピステースらソフィストは、ギリシア神話の神々もまた修辞や議論の為の道具と見なし、プロータゴラスは「神々が存在するのかわからないのか、我々には知りようもない」と明言していた。²⁷紀元前4世紀にはポリス共同体の知識人階級の間では、古来のギリシア神話の神々や英雄は、もはや崇拝の対象ではなく、修辞的な装飾と化すことになる。その後、アレキサンダー大王がアケメネス朝を滅ぼし、みずからが神であると宣言した時、ギリシア神話の神々への信仰はポリス共同体から完全に消え去ることになり、神話が備えていた真実性は消失し、神話と現実の分離が起こった。²⁸ギリシア神話の宗教としての「真実」の開示機能は、このようにヘレニズムの時代にその終焉を迎えたと言えよう。この後、千年以上にわたって続く西欧の中世・近世の歴史の中で、ギリシア神話はもはや宗教ではなく、この神話に登場する逸話や神々も、自然現象の寓意とも、架空の寓話の類とも見なされ続けた。

日本神話に関しては、前述した通り、本居宣長は、神というべきものを列挙し、畏敬の念の対象を神とみるものの、その概念を問われても的確に定義づけられない状況を如実に告白している。このような目に見えない力への畏敬の念において、「真実」の開示機能に関して推し量ることは至難かもしれない。

イスラーム思想の特徴は、アブラハム、モーセ、イエスといった預言者ムハンマド以前の歴代の預言者たちの啓示を総括し、その流れを歪曲したり絶やしたりすることなく現在に至るまで連綿と遵守し、伝え続けている点である。そのような意味で、イスラームの啓典コーランは、今なお世界中の多くの信者が帰依する、「真実」の開示機能そのものである。

思想家の丸山眞男は、世界の創世神話には、「つくる」、「うむ」、「なる」の三つの語り方がありと指摘している。²⁹

ギリシア神話において、原初神カオス・ガイア・タルタロス・エロスは「原初の生成」という『神統記』のタイトル通り「なる(成る)」神であるが、この四柱の神以降は、いずれも別の神から「うまれた(生まれた)」神々である。

²⁷ 藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』新潮社、1971年、pp.286-289。

²⁸ 川島重成、高田康成『ムーサよ、語れ—古代ギリシア文学への招待』三陸書房、2003年、pp.19-20。

²⁹ 丸山眞男『忠誠と反逆—転形期日本の精神史的位相』筑摩書房、1998年。

『古事記』においても、天地開闢の際に高天の原に現れた造化の三神や泥の中から出てきたウマシアシカビヒコヅは「なる(成る)」神の範疇に入る。一方、イザナキとイザナミとによる、島や大地、神々の誕生は、国生み、神生みという言葉が表す通り、「うむ(生む)」神の典型として分類される。

ギリシア神話と日本神話の両者共に、森羅万象の始まりには、神は自然発生的に「なり(成り)」、極めて観念的な存在として出現するが、その後、人間の男女の身体的・性質的な性別が整っていく様相が投影されたような人格神的な「うむ(生む)」神々が現れるのは、相似的な事象である。

唯一の神アッラーによる森羅万象の創造、つまり神が単独で存在世界一切を何の材料もなしに「つくる(創る)」という概念は、イスラームの大きな特性であり、存在が先行してその存在から神が顕現したという発想³⁰との差異は、自明であろう。

ゆえにイスラームにおいて、唯一の神に並び立つ存在はなく、永遠の存在である万物の創造主は、あらゆるものの存在以前の始まりであり、あらゆるものの消滅後も存在する最後の存在であるという解に自ずと導かれることになる。

参考文献

- 川島重成、高田康成『ムーサよ、語れ—古代ギリシア文学への招待』三陸書房、2003年
神野志隆光・山口佳紀『古事記注解 2』笠間書院、1993年
神野志隆光『古事記と日本書紀』講談社、1999
神野志隆光『本居宣長『古事記伝』を読む 1』講談社、2010
神野志隆光『本居宣長『古事記伝』を読む 2』講談社、2011
神野志隆光『本居宣長『古事記伝』を読む 3』講談社、2012
座喜純『常態のイスラーム—いまだ照らされていない世界—』徳高書店、2003年
宗教法人日本ムスリム協会、『日亜対訳・注解 聖クルアーン』第7刷、2002年
千田稔『古事記の宇宙』中公新書、2013年
藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』新潮社、1971年
丸山眞男『忠誠と反逆—転形期日本の精神的位相』筑摩書房、1998年
三浦祐之訳・注釈『口語訳古事記[神代編]』文春文庫、2006年
廣川洋一訳『神統記』岩波文庫、1984年
子安宣邦『平田篤胤の世界』ぺりかん社、2001年
國學院大學日本文化研究所『縮刷版 神道事典』弘文堂、1999年
谷川健一『日本の神々』岩波書店、1999年
三浦祐之訳・注釈『口語訳古事記[人代編]』文春文庫、2006年
三浦祐之『あらすじで読み解く古事記神話』文藝春秋、2012年
アポロドーロス『ギリシア神話』岩波書店、2013年
古東哲明『現代思想としてのギリシア神話』講談社、1998

³⁰ 國學院大學日本文化研究所『縮刷版 神道事典』、p.367。

Al-Tabari, Muhammad ibn Jarir, Translated by Franz Rosenthal, “The History of al-Tabari (The History of Prophets and Kings”, State University of New York Press, 1989

André Bonnard 『Greek Civilization』 The Macmillan Company 1962

Frazer, Sir James George, “Apollodorus; with an English translation”, G.P Putnam’s Sons, 1921

West, M. L., “Hesiod Theogony”, Oxford University Press, 1966

محمد بن جرير الطبري، تاريخ الرسل والملوك، دار المعارف، 1979